

戦後日本国家と継続する植民地主義

太田昌国

世界の植民地意識の変貌

戦争とか植民地支配に関わつての問題意識が世界的なレベルでどこら辺まで来ているのかという問題です。冷戦崩壊以降今日までの二〇年間に、侵略戦争と植民地問題をめぐる世界の問題意識は、格段に変貌を遂げました。もちろん十分な形ではないけれど。

私たちが二〇年前後前から強調して来たように、一五世紀末のコロンブスの大航海に始まるアメリカ大陸の征服。それによって一挙にヨーロッパ人が世界へ出て行くきっかけとなった。それが世界近代における植民地主義の始まりです。あの十五世紀末は第一次グローバル化の時代の時代であつた。あの段階で世界がいればグローバル化した、一つの球と化した。

先頭に立ったのは、スペインでありポルトガルでありイベリア半島の大西洋に最も近い海洋諸国であつた、その次に台頭したのが北ヨーロッパのイギリス帝国で一六〇〇年に東インド会社を設立、続いてフランス、オランダ、ポルトガルなども進出しながら、東南アジアがヨーロッパの大きな植民地主義の荒波に洗われる。

忘れてならないのは、アフリカ地域です。一九世紀末のアフリカの地図は、アフリカ分割図と称されて、あの広大な大陸に限なくヨーロッパ列強のいずれかの植民地と化している。が、一九六〇年、アフリカの年と言われるぐらいに、独立を遂げました。それからイギリス領の植民地も、最後にはポルトガルの植民地も、一九七五年までかかりましたが独立していきましました。

一九九二年、私たちは一〇月に、いわゆるコロンブスデーと言われる日々の前後に、「五〇〇年後のコロンブス裁判」という催しを二日間にわたって東京で開きました。ヨーロッパ近代があのコロンブスの大航海によって何をすることができたのか、それはその後のヨーロッパの繁栄にとつてど

れほどの意味を持ったのかということをめぐる討論を行いました。これは世界的に様々な動きになって、各国で実現したわけです。ヨーロッパ近代をどう捉えるかという問題に関して、二〇年前から非常に大きな転換を世界規模で迎えていて、それがこの二〇年間ずっと続けられている。

ラテンアメリカにおいても、この五〇〇年を自分たち先住民や黒人や民衆が抵抗する五〇〇年であつたという問題意識での主体キャンペーンが行われました。ヨーロッパでもアメリカ合衆国でも日本でも、世界の様々な地域でこれを契機にした歴史観の变革があつた。ですからこれは、植民地問題というのが、近代以降の世界を考えるうえで避けられない問題であつたということが、さらに普遍化していく一つの大きなきっかけであつた。

二〇〇一年八月から九月、「人種主義、人種差別、排外主義および関連する不寛容に反対する世界会議」というものが、南アフリカのダーバンで開かれた。これはアパルトヘイトが廃絶されて一〇年足らずのうちに国連も係わつた国際会議です。ここで初めて、欧米諸国と、植民地主義・奴隷貿易・人種差別の犠牲になった地域の政府代表及び民間代表が一同に会して、この問題を二一世紀初頭に生きる我われはどのように考えるべきかという討論が行われた。もちろん対立しました。奴隷貿易をやり人種差別を、行い植民地主義を実践した側は、歴史的な過ちを言葉では認めたとしても、補償問題が出されると「そんな三世紀・四世紀前のことを、そんなふうに言い出したら世界はとんでもない無秩序になる」と言つて反対しました。「パレスチナ占領地のイスラエルによる占領形態は、現在なお続く人種差別の典型的な現れである」というふうな演説が行われた時には、イスラエルとアメリカ合衆国の代表が怒つて席を立ちました。様々な対立矛盾を抱えた会議ではあつたけれども、少なくとも国連が関わつた国際会議で、このようなことがまともな討議の対象になったことは画期的です。このよう

な段階までつい一一年前に世界は来ていた。この会議が終わって三日後、いわゆる9・11が起り、ダーバン世界会議の意義は、その後日本でも世界でも深く浸透しないまま報道がほぼ絶えてしまいました。一部研究者などの手によって詳しい報告書などは出ていますが、残念ながらもっと広いレベルでこのダーバン世界会議の意義が私たちの中に浸透していくことは妨げられた。

その後も、二〇〇七年、ブッシュはアフリカ・セネガルのゴレ島という奴隷貿易の根拠地を訪れて、「奴隷貿易は歴史上の最大の犯罪であった」と言い、同じ年にブレアも、奴隷貿易にイギリスが国家として関与した事を謝罪した。まだ戦争を一方的な軍事攻撃は絶対止めるつもりのない米英首脳でさえ、歴史的過去としての奴隷貿易についてはこのように認めざるを得なかった。もちろん言葉の上の謝罪であると批判することも可能だし、補償という問題が提起された時には絶対飲むはずがないという批判も十分できる。しかしながら世界は、過去の歴史的な犯罪、人類が行った犯罪に関して、このような言葉で語らざるを得ないような時代に入っている。

日本の植民地意識と安保条約

戦後日本国家において、植民地意識が継続しているという問題意識を私たちが持つとすれば、それはどのような形で継続しているのか。



一般的な歴史書、社会的通念からすれば、日本の最初の植民地支配というのは、一八九四年の日清戦争後の台湾の領有であり、一九一〇年の朝鮮の併合であると語られ信じられています。僕は別な考え方を持っている。起点は明治維新の翌年

一八六九年の蝦夷地の併合であると。蝦夷地を北海道と名前を変えて、近代国家日本の領域圏として包摂した。その一〇年後、一八七九年には、恐ろしい「処分」という用語が使われていますが、独立王国であった琉球をやはり明治維新国家に包摂した。この二つの歴史的事態を、近代日本の植民地主義の具体的な始まりであるというふうに捉えるのがいいのではないかと思います。

朝鮮支配にしても、一九一〇年という朝鮮併合の年が突然現れたのではなくて、アメリカ帝国によって浦賀沖で砲艦外交が行われた二二年後の一八七五年には、江華島へ行って同じ砲艦外交を繰り返して、朝鮮に対する一方的な様々な外交的な要求を行って以来、三五年を費やして韓国を併合したんだという歴史過程。一八九五年という日清戦争後の台湾領有によって、いよいよ外に向かつて行く日本という近代の捉え方をするのではなくて、もう維新前後からそのような動きが始まっていた。それは米国やそれに追隨したほかの国ヨーロッパ諸国によって行われた砲艦外交や不平等条約の強要を、アジア近隣諸国に自分たちの責任において行った。そのような出発点であったのだというふうに捉える必要があると思います。

次に一九四五年の敗戦の問題です。なぜ日本は断絶なき戦後の始まりを迎えてしまったのか。なぜあの戦争犯罪を自分たち民衆の手によって裁くことができず、植民地支配の問題を自らの手によって提起することができず、なぜダラダラと天皇制と官僚制を頂点とした体制が戦後も続いてしまったのか。

豊下楯彦さんの『安保条約に成立』（岩波新書、一九九六年）と『昭和天皇・マッカーサー会見』（岩波現代文庫、二〇〇八年）、この二つの書物をきっかけとして、六〇年前の対日平和条約と日米安保条約が、どんな当時の政治の力によって実現されたのかという史実も十分信頼できる資料に基づいてわかるようになりました。天皇ヒロヒトが、度重なるマッカーサーとの会見の中で、自分の保身のためにどのような日本の占領統治の条件を出し、憲法の条件を出し、沖縄統治の条件を出したのかという問題と繋がって来ているということが、豊下さんを初めとする著作の中で、あるいはその後



明らかになりつつある歴史的事実の中ではつきりしています。これは私たちが今後依拠できる、非常に大きな論拠なのですが、しかし、日本の中では今このような史実が十分に伝わってはいない。これからの私たちの課題となつて残っているのだと思います。

このようなことを考えれば、ある過去の時代をどのように捉えるのかというのは、やはり全体的な視野を持つていないと、非常に一面的であつたり、本質を見ないである現状のな目新しさに目を奪われるものであつたりする。

あきらめないで問題提起を続けること

一体これからのように問題を捉えていくべきなのか。それを思想的な課題として、あるいは歴史認識の課題としてお話ししたい。

さる都知事とか、二つの大都市の市の市長とかに典型的なように、既に歴史的に立証されているような問題に関して絶対的な事実を覆すことができない。彼らは、本当にその隅っこにあつたかもしれない個人的な話、エピソード、そういうものに依拠して何かものを言う。それがまるで既に立証されている歴史的事実に拮抗できるかのような演出をする。メディアも批判力がないのでそれを突くことができない。それが非常に苛立たしいところなのだけれども、手に取るのも嫌な雑誌たちの問題提起というのはそのような水準のものであるから、これに対して一体どういう有効な反論の仕方があるのだろうかということは、共に考えたい。決して軽視してはなら

ないと思います。

小林よしのりの漫画に目を奪われ、心を奪われて読んでいる若い人たちが、同時代に大量に存在したことは事実ですから。それが何万部何十万分という売れ行きによつて実証されたわけだから、そこは私たちが逃げるべき場所ではないだろう。そこでどう有効に戦うかということを考えたい。

いろいろな活動も理論的な問題提起も、実るまでには時間がかかるので、本当にめぐる必要がありますけれども、先程の新垣さんのお話を聞いていても、沖縄の闘争をずっと見ていても、あるいは世界各地の様々な侵略戦争や植民地支配に関わつての復権の活動を見ていても、弛まず問題提起することが、どこかで、何十年後かに実を結ぶものがあるかもしれない。なかなか人間はそれほど賢くなくて同じ過ちを何度も繰り返してしまう。しかしそれでも問題提起を続けることによって活動が続けることによって、実を結ぶ時期を少しでも早めることができる。冒頭に触れた侵略戦争と植民地支配、奴隷貿易、奴隷制度に関する遅々たる人類の歩みは、あきらめてはいけないということと呼びかけている。問題提起を続ける人がいたから、世界の水準でそこまでようやく来たのです。「ここまで来たのだから」というところで、私たちは常に問題を前向きに捉えて、これからも様々な努力を続けたいと思います。